

もしも異世界プリンセスがオレの部屋にやってきたら

# ダメしてやりまくるに決まってる!

●あらすじ●

成績は悪いがワル知恵は働くDT男子校生の部屋へ、  
なんと、異世界のプリンセスが時空転移!  
Hなカラダ & 美人過ぎ & 気立てのいい王女 × 悪徳DTの行方は……!?



●シチュ、属性●

王女、男子校生、和姦エッチ、お下劣ペロチュー、  
初体験、絶倫デカ×ン、正常位、○宮に精○注入中出し



adults only

ノベル (挿絵あり) 作品

●CG枚数●  
H挿絵6枚 (差分込み)  
を含む合計11枚 (差分込み)

●あらすじ● (この物語はフィクションです)

成績は悪いが悪知恵は働く平凡な男子高生の部屋へ、なんと、異世界プリンセスが魔法で時空転移!

観光に来たという、美人でカラダがエッチで気立てのいい王女を前に、童貞で人一倍スケベの彼は、悪辣いやらしい奸計を思いついて……!?

●分量● 文庫本で60P弱

●主な登場人物●

◆御前田悠 (おまえだ ゆう)

成績は悪いが頭は悪くない平凡な男子高生。スケベの童貞。

◆セイラ・エレクト

異世界の王女。

容姿端麗で気立てはいいのだが実はかなりの……。



## ●目次●

前編「異世界プリンセスがオレの部屋へ、観光目的時空転移!」……………	04
♀中編「異世界プリンセスのお口と舌はドエロベロチューお下品性器」…	19
♀後編「異世界プリンセスの子宮はオレの凡俗庶民精子でパンパン」……	35
エピローグ……………	56
あとがき……………	63

\* 章題の「♀」はHシーンがある回という印です。

\* 本編に目次のと通りの区切りはありませんが、

PDF版には目次どおりにしおりが設定してあります。

\* 小説の一部は体験版・立ち読み版には未収録。

\* リフロー版は環境によってページ数が異なります。

ある日の放課後。

平凡な男子校生の御前田悠は、いつものように、大学生の姉に猛烈に叱られていた。

「あんたって子は!」

家でも無駄に白衣姿の工学系女子大生の姉の怒声が、彼の自室に響き渡る。

彼女は正座させた弟の前で同じように正座していた。バシバシとしきりに叩くのは、床の絨毯に置いた一枚の書類。彼の成績表である。

「いつもいつもこんな成績取って!」

柳眉を逆立てる姉は横の本棚を睨みながら、こんなことを言う。

「また増えてる……まったくこの子は、成績を上げないで、エッチな本の収集熱ばかり上げて……男の子なんだから、買ったり見たりしちゃいけないとは言わないけど、そればかりにかまけていちゃ、ダメでしょうが」

視線を弟に戻す。彫像のように俯く弟に言いつのる。

「世の中の口さがない人が、あんたの成績が悪いのは、そういう本のせいだなんて、言いふらすかも知れないのよ? あんたのていたらくが、あんたの大好きなものが貶められるキッカケになるの。そんなのはいいがかりだと思うかも知れないけど、そういうものは意外と受けられる世の中なの。そんなの嫌で

しよ？ だから、ちゃんとなさい!」

すると、初めて弟が反応した。顔を上げて無表情に言う。  
「ンなこと言われてもなあ……学校の勉強なんて、社会に出てから役に立つとは限らない。むしろ、役に立たない可能性の方が多い。無駄なことにやる気が出ないのは、ごく自然なことじゃん」

姉の顔がまともに強ばった。またもや怒鳴るような仕草をする。だが、大声は出なかった。喉まで出かかった言葉を呑み込む風に喉を鳴らし、五六度深呼吸。それから静かに諭してきた。

「成績が上がれば、モテる確率がグッと上がるわよ」

「……あー」

同意するように声を上げた弟。

姉の目が光った。やたら乙女チックな顔と声をし、さらにシナまで作って畳みかける。

「成績のいい悠くん、ノート見せて……あたしの部屋で勉強会しましょう……息抜きに、エッチなことしよっか。あたし、悠くんのこと前から……なんて、あんたが読んでる本みたいなことが起きる可能性は、格段に上がるでしょうね」

弟は首を傾げた。

「えー……………なあ、姉ちゃん。オレはノンフィクションものなんか、一冊たりとも持ってないぜ。全部フィクション、作り話の本ばかりだ。つまり、オレが読んでる本のようなことなん



人指し指を立てた。正座で見上げる弟にずいっと身を乗り出す。

「才媛のこのあたしが、子供の頃からシゴイで鍛えてきたあんたは、決して落ちこぼれなんかじゃない。むしろ、いいモンを持ってる。保証する。でも、やる気がなくちゃ、いいモンも発揮されないわ。それを含めて自分について反省してなさい」

一方的に言い放ち、成績表をポケットに突っ込むなり、姉はそそくさと出て行った。

部屋が静まりかえると、悠はベッドに飛び乗った。

小さく軋みながら弾み回るスプリングに揺すぶられつつ、ひとりごちる。

「姉ちゃんはいいい奴なんだけど、口うるさいのが残念だよなあ」

反省の気配などまるでない仕草であくびをする。

そのときだった。

ピカアッ!

突然、部屋の真ん中で白い光が爆発した。

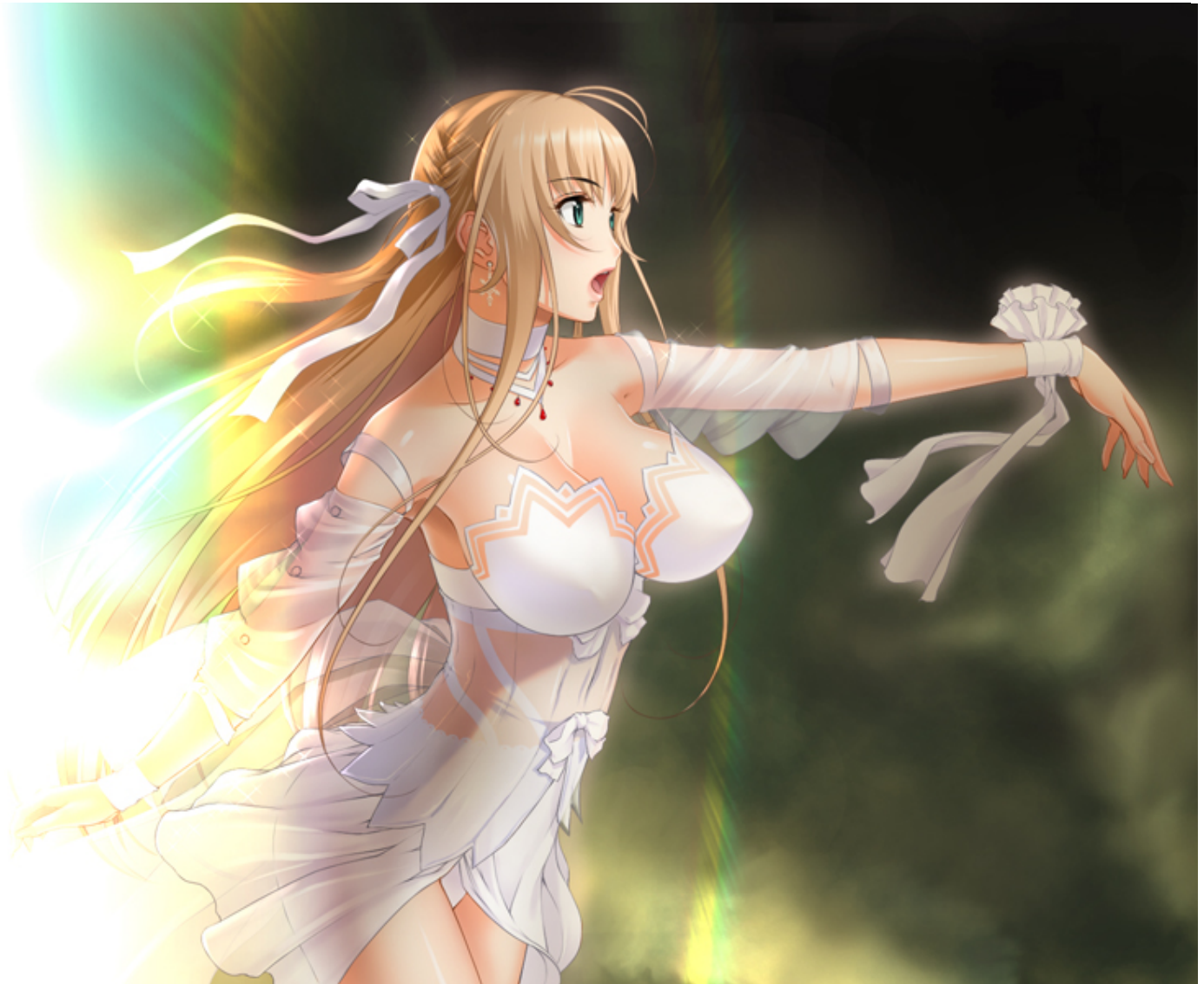
「な、なんだよ!」

彼は慌てて起き上がる。光は絨毯の床を走っていた。人が一人通り抜けできそうな円を描き、見たことのない複雑な模様をいくつも浮かばせる。

「これって魔方陣って奴じゃ……だとすると、この通り道を使って、誰かが現れる?」



狐につままれた気分で眺めていると、果たして、シルエットが浮かび上がった。その次の瞬間、光の魔方陣は弾け飛んだ。部屋中が白い光で満たされる。



「うわっ！」

烈火の如く姉に叱られても動じない悠も、流石に驚き大声を



上げた。

そんな中、聞き覚えのない声の眩きが聞こえる。

「どうやら、時空転移が成功したようですね」

やたら綺麗な声だった。上品で柔らかい耳障りで、まるでアニメで聞くような声である。現実ではそうそう聞けない類いの貴重な声だ。

「え……女の子……？」

光の爆発が収まった自室の中央には、美声の持ち主と一瞬で納得できる、それはそれは美しい女性が佇んでいた。

年頃は悠とそう変わらないだろう。つまり、女子高生位。しかし、その辺の女子など手も足も出ないほど、容姿は抜群だ。

明るく長く流れる金髪が育ちのよさを強調する、端麗で穏やかな童顔。社交会場から抜け出してきたみたいな純白ドレス姿は、アニメやマンガのセクシーヒロインみたいな、メリハリのありすぎるラインを浮き上がらせている。スリーサイズにして、バスト九十八、ウエスト五十八、ヒップ九十六というところか。身長はその辺の女子高生よりも少し小柄に見える。百五十八ほどだろう。百七十強の悠よりもだいぶ小さい。

「あら……」

悠の存在に気付いた、ベビーフェイスでトランジスターグラマーの彼女は、スカートの両端を摘まみ、優雅に上げて一礼した。



「ごきげんよう」

「あ、これは、ご丁寧にと、どうも」

丁重すぎる挨拶に面食らった平凡男子は、慌てて頭を下げた。ベッドの上であぐらをかいていたのに気付いて、すぐさま正座し、居住まいを正す。

「異世界はK王国より、時空転移魔法……魔法というのは、精

神力で世界に干渉する技術なのですが、それを使い、参上しました」

「い、異世界……？」

「はい。異世界です。この世界とは異なる時間軸、空間軸に存在する場所が祖国なのですから、そう表現しても構いませんでしょう」

「……そうですね」

相手に合わせて敬語で同意する。

そんな彼に、セイラは小首を傾げた。

「あまり驚かないのですね」

「そりゃ、よくある話ですから。異世界転生とか、異世界召喚とか。向こうに行くのとは逆に、こっちに来るケースも珍しくありませんし」

チラリと本棚を見る。

もちろん、作り話の中での話だ。現実では科学が発達しているが、異世界に行くような技術はない。だが、そんなことを説明しても面倒なだけ。いいことなどありはしない。現実に行きかけていることに適当に合わせての方がやりやすい。

「まあ、そうでしたの」

異世界の女の子は、片手を口に当てた。意外そうにした彼女は、思い出したようにこう言った。

「申し遅れました。わたしは、セイラ＝エレクトと申します。

これでもK王国の第三王女ですが、どうかラクになさってください。ここは向こうの世界ではありませんし、あなたも臣民ではないのですから」

穏やかに微笑する。

「王女様だったのか……道理で……」

悠は息を呑みつつ、彼女の言葉を素直に信じた。確かに、そんな感じである。

「オレは、御前田悠です。ユウって呼んでください」

馬鹿丁寧に申し出る。とはいえ、意識しているわけではない。ラクにしていると言われたが、向かい合っていると自然と気持ちが引き締まり、丁寧な態度になる。

(これが高貴な人のオーラの力って奴なのかな)

そんな感想を持ったとき、ようやく気付いた。

「そういえば、セイラ王女。この『ニホン』国の母国語のニホン語を、ネイティブ同然に使いこなしていますね。異世界の人なのに……」

疑問を口にすると、王女は親切に答えた。

「こちらにお邪魔する際、言語習得の魔法を使いました。その効果で、おっしゃる通り、ネイティブのように話せるのです」

「なるほど。事前に、ほんにゃ○こんにゃくを食べていたようなものですね?」

「え、ホンニャク……なんですか? あら……おかしいわ。言

葉の意味がよくわからなかった……魔法は完璧のはずなのに……」

「いいえ、こっちのことです。気にしないでください。ちゃんと、コミュニケーションはとれていますから、問題はありません」

「そうなのですか？」

腑に落ちない顔をした王女だが、すぐに気を取り直した。

「ともあれ、かけていたのは、言語習得魔法だけではありません。環境不干涉の魔法もかけていました」

「環境不干涉？」

「わたしがこちらの世界を訪れたことにより、なんらかの影響を与えないようにする魔法です。たとえば、わたしの世界では無害な菌でも、こちらの世界では病原菌になってしまう、そんな菌を持ち込んでしまわないよう……他には、わたしの言動がこちらの世界の正常な未来を変えてしまわないよう……そんな効果です」

「要するに、この世界にいる間、王女は空気みたいなものなのですね……けど、そんな手間暇をかけて、なんだって、この世界に来たんですか？」

率直に訊ねると、王女はこともなげに言った。

「観光です」

「観光なんですか」

彼女はとうとうと説明する。

「わたしの国……世界は、緑豊かで風光明媚。生き物が調和し、穏やかに生きる素晴らしいところなのですが、いくら素晴らしくても、同じ景色ばかり見て過ごしては飽きてしまいます。王女として相応しい人間になるよう、日々のお稽古ごとのストレス解消という面もありまして、それでときどき、異世界に観光に訪れています」

「なるほど。観光を求める気持ちは、こちらの人間も似たようなものですよ」

「ご理解くださり感謝します。それで、ぶしつけなお願いで恐れ入りますが、ユウ様にガイド役をお引き受けいただけませんか？ もちろん、お礼は十分いたします」

「オレがガイドですって？ ……いいですよ、オレでよけ」

最後まで言う前にハタと気付く。

(こんなに可愛い子のガイドをするということは、ふたりきりであちこち見て回るということ。これってほとんどデートだろ。願ってもない)

異世界の王女は、嫌と言うほど見ているくだらない同級生とは全然違い、魅力に溢れている。デートできるのなら、お金を払ってもいい位だ。

(けど、オレの世界なんか見せていいのか?)

話を聞く限り、王女の世界は動植物のバランスがとれている



楽園のようなところらしい。

一方、こちらは、科学技術は発達しているが、自然は破壊され、人心は乱れている。おとぎ話から抜け出してきたようなドレス姿の王女が出歩いたら、たちまちケータイの被写体だ。良くも悪くも騒ぎになるに違いない。姉や母親の服を着せて一般人に溶け込ませる手は使えないだろう。ナイスボディすぎるプリンセスが着られる服など、一着たりとも、あのふたりが持っているとは思えない。

「あの……お願いします。こちらに滞在できる時間は、二時間ほどしかありません。なにか問題があるのでしたら、解決に努めます。なんなりとおっしゃってください」

スイカかメロンみたいに、見事な球形を描く豊満なバストの前で両手を組んで、哀願してくる。

その仕草と、切なそうな表情は、なんとも言えなかった。

ズキュンッ!

現実の女子にはまったく興味を持たなかった童貞男子の心が、弾丸に撃ち抜かれたみたいに激しく揺れた。

彼の心に、邪な気持ち急速に広がっていく。

(そんなに見たいのなら、新しい世界を見せてやろう)

ドス黒い興奮に襲われ、喉が渇くのを自覚しながら、「ユウ様……?」

困惑する王女に、童貞男子は真面目な顔で詭弁をぶつ。

「よく聞いてくださいプリンセス」

「はい」

「こちらの世界に影響を与えないようにというご配慮には感謝します。ですが、こちらの世界が異邦人に影響を与える可能性を考えてください。具体的には、病原菌ですね。こちらの世界の菌が、あなたを害してしまう可能性です」

「確かに……」

どうやら考えていなかっただけらしい。彼女の顔が青ざめた。

「ですから、ワクチンを接種させてください。オレが接種させてもらいます。それを行えば、安全です。いくらでも、こちらの世界を観光していただけます」

王女はホッとした様子で頷いた。

「もちろん、受けさせていただきます。わたしの健康と生命へのご配慮に感謝いたします……ですが、ユウ様がワクチンを接種してくださるとは？ 見たところ、それらしい道具は見当たりませんが……魔法をかけるのでしょうか……」

平凡な男子校生の自室を見回し、部屋の主も注意深く見た彼女は疑問を投げかける。

「ワクチン接種の道具は、このオレです」

「え？」

「オレの粘膜とプリンセスセイラの粘膜を合わせ、オレの体内に生きるワクチンの菌を移すというやり方なのです」

王女は先ほどよりも困惑した。眉根を寄せておずおず確認する。

「粘膜を合わせるというと……」

「ズバリ、性行為です」

才媛の姉が一目置く、それなりに回る頭を悪用して、でたらめを並べる男子校生は、信じさせるために、深刻に告げる。

「せ……性行為……王女であるこのわたしが、異世界の殿方と……?」

プリンセスはすっかり怯えた様子だ。そんな彼女に、彼が弁解する。

「すみません、言い方が悪かったですね」

「……どういうことですか?」

「厳密には、性交類似行為と表現します。どこからどう見ても性行為だとしても、飽くまで医療行為。なにせ、ワクチン接種が目的なのです。先ほどは分かりやすいようにそう呼びましたが、断じて、性行為ではありません」

彼女は胸をなで下ろした。

「それならよかった。たとえ性行為にしか見えなくても、ワクチンの接種なのですよね。性行為ではないのですよね」

心底安心したらしく、ホッと溜息を吐く。

「K王国の王女ともあろう者が、観光先で性行為をするなど……そんな、異国で買春するにも等しい下劣極まる恥知らずを行

うなど、許されませんもの」

童貞詐欺師も安堵する。まじめ腐った顔をしながら、  
(よっしゃ! この美人王女様め、まんまと騙されやがったぞ!)  
胸中で快哉を叫ぶ。

(チョロすぎる。緑と生き物が調和した平和な国の育ちのいい箱入り娘だから、コロッと騙されるのかね。だとしたら、平和も考え物かもな)

そんなことを思いつつ、ゲスな罠にかけた無垢な獲物をまじまじと見る。

(でも、そんなチョロいところも可愛いな。ますます、美人に見えてきた。この異世界の女王が、オレの初体験の相手になるのか。最高だな)

問題はなにもなかった。

現実の女子に興味はないが、徹底的に拒絶しているわけではない。魅力的な相手には、ちゃんと胸がドキドキする。性行為の相手と認識すれば、ペニスは熱く硬くなる。

あと二時間弱でいなくなるというのも、都合がよかった。後腐れなくやり捨てる——異性を人間扱いせず、オナホールやティッシュ同然に扱う最低男の気持ちとは、こういうものかもしれない。なににせよ、面倒臭くなく、迷惑を被らないのはありがたい。

病気の心配もいらないうららう。こちらの世界への干渉を完全

に封じる魔法をかけているのだから、仮に病気持ちであっても、移されるわけがない。

「それじゃ、早速」

「はい。よろしく願いいたします」

童貞の汚い嘘を信じ切っている王女は、丁寧にお辞儀をした。

ぶるんっ!

その瞬間、大胆に襟ぐりが開き、生白く輝く上乳がほとんど露出する胸元が、大きく弾んだ。

(うおっ! 今更ながらすげえ乳! 姉ちゃんも母ちゃんもクラスの子も、足下にも及ばないぞ)

躍動的に弾んだドレスの乳房にペニスを硬くしながら、ゆっくり彼女に近づく。

少し膝を曲げ、唇の位置を合わせた。

(ああ、ドキドキする……これがオレのファーストキスになるんだな……)

医療行為という建前が崩れないよう、不自然にならない程度にじっくり王女の口元を見る。

(かあ〜っ、なんて綺麗な唇なんだ……ふっくら柔らかそうで、化粧なんかしてないのに、バラみたいに赤い。健康的なツヤもある。実に美味そうだぜ)

こんなに綺麗でそそられる唇は見たことがない。

こんなにもいいものに、自分はキスできるんだ。

童貞男子は感激しながら唇を重ねた。  
むちっ。



唇の表面同士を軽く触れさせる程度だったが、瞬時に強い性感が湧いた。  
(う、うおっ!)



唇全体に甘い情動が広がって、勃起途中の逸物が、喜ぶように一段と硬くなる。

(なんて気持ちいいんだ……!)

目を閉じ、王女の唇の感触に集中すると、性感はさらに増し、頭がジンと痺れてきた。

「んっ……んふう……」

薄目を開けると、王女も目を閉じていた。喉の奥で呻いているが、嫌悪や拒絶の気配はない。唇をふさがれて自然に出たという雰囲気だった。

身体のバランスを取るためだろう。こちらの両肩に白く清廉な手袋の手を置く。間に衣類があるので温もりは伝わってこないが、軽く柔らかな感触は肩にハッキリある。それもなんとも心地いい。

異性に半ばしがみつかれているのも、その気になれば十分、振り払えるのにしっかりキスを受け止めてもらえているのも嬉しくて、性感が一段と上がる。彼はますます興奮し、心臓をドキドキ高鳴らせながら、大胆な気持ちになった。

(これなら、先に行けそうだ……唇同士をぶちゅっと重ねてみよう)

日頃、学園の女子からはゴミでも見るような目で見られている顔を傾けた。彼女らなど足下にも及ばない魅力を持つ、異世界王女の唇と自分のそれを、最高に密着させてみる。

ぶちゅうううううう!

力を込め、押し倒す心地で、こんなときでもなければ決して触れられないプリンセスの魅惑の唇の感触を、モテない男の唇で味わう。

(おおおおお! いいぞ、これ!)

童貞男子は胸中で歓声を上げた。

先ほど以上の密着感に、より濃密な性感が湧いた。頭どころか全身が甘い痺れに包まれる。勃起はさらに大きくなった。完全に屹立した分身は、ズボンと下着に押し込められながら、ビクンビクン跳ね回る。少し屈み、彼女と距離を開けていなかったら、きっとお腹か股間に当たっていたことだろう。

「んんっ……んむふう……」

一方王女は、やはり大人しく受け入れていた。

眉根を寄せ、甘い音色を帯びるくぐもった声を漏らしている。(異世界の王女様ともあろう者が、成績の悪いクズ男子校生とのキスを、受け入れてくれてる!)

彼女のキス顔もキスの吐息も性感をかき立てた。現実の異性など興味はないと思っていたが、案外悪くない。ただし、面倒も迷惑もない可愛い子に限るが。

(し、舌も入れちゃうかな……)

有頂天の童貞男子は、調子乗りのレベルを上げた。

(こんな可愛い子ちゃんとキスするなんて、きっと、最初で最

後だ。どうせなら、とことんいきたい。でも、流石に騙されてると気付くかな……いや、そのときはそのときだっ。こんな好機を逃す手はない。どうにでもなれ!)

性欲の盛りの年頃だけに、劣情中心にものを考えた童貞は、腹をくくった。

とはいえ不安は拭えていない。彼は、怯えと貪欲の気持ちで震えさせながら、舌をゆっくり伸ばした。

「んっ……むんふうっ……」

半開きの王女の唇に浅く進入した瞬間、ほとんど力が入っていなかった彼女のそれから、完全に力が抜けた。どう考えても、意図を察した上でオーケーしてくれている仕草である。

(やった! いけるぞ!)

童貞男子は、遠慮なく舌を伸ばした。拒絶される不安は、受け入れの仕草をされたときに、綺麗に消えている。性欲の気配を撒き散らしながら、彼女の口中に入り込んだ。

ちゆく……れろれろ……れろれろれろれろっ……。

赤紫色の男子の汚い舌で、ピンク色の清楚な王女舌の先に触れた。彼女は舌を引っ込めることすらしなかったなので、そのまま全体を舐め回す。

(おおっ、舌で舌を舐め回すのも、気持ちいいぞっ)

舌は全身筋肉。柔肉というよりも弾力の塊といった方がしっくりくるが、温かくてヌルついて、表面が凸凹している牝肉の

塊の触り心地は、堪らなかった。唇同士を密着させるのも快感だが、こちらも種類の異なる性感。やれば天にも昇る気持ちになれる性行為をふたつ同時に行っていると、数秒ごとに、ドライオーガズムしそうになる。

「んむむっ、べろっ、べろべろっ……んふうー、んふふんー、ねろねろべろべろべろん」

童貞男子は夢中になって舐め回した。顔を傾け、唇同士を密着させながら、舌をしつこく這わせる。続ければ続けるほど湧いて濃密になるディープキス快楽を貪り、屹立する勃起をビクンビクン震えさせる。

と。

「ぶくちゅっ……す、少し待ってください……はあー……はあー……」

もう我慢できないといった強引な仕草で、王女が顔を振り、キス拘束を振り払った。

(しまった! 流石に気付かれたかっ)

表面上は大人しかったものの、心の中は違ったのか。実際は、嫌だったに違いない。

王女の突然の行動からネガティブに察した童貞男子は、後悔の念に駆られた。

(調子に乗りすぎちまったらしい。きっと、騙されてるのに気付いたんだ。こんなワクチン接種なんて、あるわけないもんな

……くそお、童貞を捨てるどころまでイクつもりだったんだが……巻き返しは可能だろうか……?)

成績は悪いが、才媛の姉に鍛えられた頭脳をフル回転させ、上手い言い訳を考える。

だが、考えが纏まる前に、王女が言ってきた。

「すみません……はあ……はあ……息が続かなかったものですから……今、呼吸を整えます。少しだけ待ってもらえますか?」

「え?」

童貞男子は一瞬戸惑ったが、すぐに理解した。

(よっしゃ、気付かれてない! このまま続けていいんだ!)

ネガティブな思考が勘違いだったのに、心底喜ぶ。

そこに王女が訊ねてきた。

「あの……舌をすごく絡ませてくれましたが……やはり、あれ位、粘膜を触れさせないと、ワクチンの接種にならないんですか?」

「はい」

成績は悪い癖に頭の回る童貞は、真面目な顔で即答した。

「まるで性行為のディープキスみたいでしたが……」

「不快でしたか? ですが、先ほどもご説明したとおり、これは医療行為なのです。どうか、ご辛抱ください」

心の中で下品に喜んでいたとは思えない真摯な態度で、タチ

の悪い嘘を並べる。

「そうでした……性行為ではなく、医療行為ですものね……」

王女は真剣な顔で前置きし、

「でしたら、その……わかりやすく伝わりやすい言い方を  
するためとはいえ、品のない表現をするのをどうか許して欲しい  
のですが……」

信じられないことを言ってきた。

「舌だけでなく、お口の中全体をお互いに舐め回した方が、効  
果的かつ効率的ではないのでしょうか？」

「もちろんです。流石はプリンセス。お察しがいい」

彼は賢さに好感を持ったように微笑する。

「ありがとうございます。では、そのように……」

王女は、照れた笑みを浮かべる。

童貞男子は心の中で絶叫した。

(うおおおおおおおおお! 美人プリンセスと、完全合意ベロ  
チューできるぞ〜〜〜!)

騙して行為に駆り立てている癖に、自分勝手に大喜び。

「では、早速」

「はい。よろしく申し上げます……はしたない女だと、どうか  
軽蔑しないでくださいね」

いくら医療行為と思っても、これから自分のすることに恥じ  
らしいの気持ちを覚えているらしい。王女は赤面している。



「軽蔑するなんてとんでもない。ご理解とご協力に感謝します」

そんな彼女をますます可愛く思いながら、童貞男子は再び唇を重ねた。

ぶちゅっっっ……れろおおお……。

顔を傾け、唇同士を完全密着。

その気を込めて開かれた王女の唇に舌を割り込ませ、彼女のそれと再び触れ合う。

れろれろ……ぶちゅ、むちゅ……れろれろれろ……べろべろべろべろっ!

王女の可憐なピンクの舌に、薄汚い赤紫の童貞の舌を絡ませて舐め回す。それだけに飽き足らず、綺麗な桃色の歯茎も、真っ白く輝く歯も何度となくなぞり、這い回り、自分の唾液と感触を染みこませていく。

(異世界王女の口の中、どこも美味すぎっ!)

口内の温かさも、触れ心地も、ツバのほの甘い味と風味も、なにもかもが魅惑的だった。唇を合わせて舐め回し、存分に感じているだけで、完全に勃起しているペニスから先走り汁が溢れる。気を抜くと目の前が真っ白になり、軽い絶頂感に見舞われた。

(プリンセスとの卑猥ベロチュー最高ッ!)

抵抗しないのをいいことに腰を抱いて、一心不乱に食べる。

「んんっ……んふうっ……んふううん……」



一方。

お相手の異世界プリンセスも、同じような心境だった。

悩ましげに眉根を寄せ、落とした睫を小さく震えさせつつ、甘くくぐもったあえぎ声を漏らす。そんな、童貞男子に比べたら澄ました様子の彼女だが、こんなことを思っていた。

(わたし、異世界に来て、いやらしいキスをしてしまっていま

す……!)

胸中に、興奮した声音を響かせている。

(相手の方は……冴えない風体を見れば、庶民なのは明白。国に帰れば崇められる地位にいるこのわたしが、庶民などとキスしてしまっておりますわっ)

唇を重ね、舌を絡ませ、軽く抱き合っている密着感に昂ぶっているのは、彼女も同じだった。純白のドレスに包まれる若い肢体は体温を上げ、可憐な美貌の目元は羞恥も手伝い真っ赤に染まっている。

(この方は……庶民のユウ様は、医療行為などとおっしゃいましたが……なんて性欲の籠もった医療行為なのでしょう……こんなに激しいだなんて……唇で、舌で、ゴーカンしているも同然です……!)

王女セイラも、舌を使い始めた。

(プリンセスであるこのわたしが……庶民にオカされているだなんて……!)

れろれろ……べろっべろべろ……べろべろべろ、ぶちゅ、ねろねろねろねろ……!

暴れ狂う風車よろしく、舌を高速回転。慎み深そうな顔貌からは想像できない下品さで、庶民の舌を舐め回す。

(なんという倒錯……なんという退廃……刺激的すぎますっ)

涎の太い筋を口の端からこぼし、周囲にツバを飛散させなが

ら、没頭する。

するとすぐに、童貞男子が同調した。大人しそうな王女の淫行に驚いて、一瞬固まった彼であったが、すぐに彼女に負けない位、それこそ、飛行中のヘリコプターよろしく、舌を高速大回転。

それに王女は。

(ああっ、一段とすごい舐め回しが来ましたっ……はあ、はあ……なんという舌責めでしょう……テクニックなどなにもない。心地いいメスの感触を切羽詰まって求めるだけの、オス獣欲丸出しの、必死ディープキスファック!)

負けじとばかりに熱を込め、さらに猛烈に舐め回す。

(はあぁん……ダメですわ……所詮わたしはか弱い女……本気を出した若い性欲の権化には、敵わない……舐め回しのインフレバトルには、ついていけません……)

頑張っても、それを上回る速度と勢いで舐め回してくる庶民男子の前に、弱音がこぼれる。だが、彼女の目は死んでいなかった。

(ですが、王女の名にかけて、庶民に圧倒されて終わるわけには参りません!)

落ちた睫毛の奥でプリンセスの目が光る。

「ぶぢゅうううううううう! ……………コクン……コクンッ……」

恥も外聞も無い下品な吸引音を響かせて、童貞男子の口を吸い、流れ込んできた自分と彼の唾液の混ざり汁を、躊躇いもなく嚥下した。

その途端、嵐のように荒れ狂っていた彼の舌がピタリと止まる。力を完全に失い、彼女の口全体に吸われるがままになった。

「んもんも……………じゅぶうううううううう！」

王女は自分の口の中に引っ張り込んだ男舌を粘膜でぴっちり包み、さらに吸引。頬をぼっこり凹ませた、王族の面汚しフェラチオ顔になって、しゃぶり尽くす。

(うお……………おおおおおお！ お、オレのベロが、異世界王女に吸われてる……………いや、貪られてる！ ツバを吞んでくれただけじゃなく、無様エロいフェラ顔で、締めて絞って圧迫して、吸ってくれてる！)

童貞男子が激しい感激と性感に包まれた。

他方、王女が目尻が妖しく下がる。

(うふふ……………すっかりなすがままです……………勢いだけの稚拙なキスを踏まえますと、きつとこの方は童貞……………やはり、こういうテクニックには脆いものでした)

完全に無防備になっている舌を一段と音を立てて吸いながら、悦に浸る。

温かい粘膜の触れあいだけに、されている童貞も気持ちいいが、王女も同じ位に気持ちいい。しかも、自分を圧倒しかけた





その瞬間、不満そうに小さく戸惑った彼に、一段と下品で淫らな提案をする。

「ユウ様……あの……唇と舌を触れ合わせるのも、効率的ではありませんか?」

「え……?」

察しが悪い庶民童貞に、実際にして見せる。

王女は少し顔を引いた。唾液の糸を引きながら口元を離す。れろおおお。

そうしておもむろに舌を伸ばした。庶民男子の舌と散々絡み合ったとは思えないほど清廉だが、唾液を纏ってヌラつく姿がなんとも艶めかしい桃色の舌で、少し黒ずんだ彼の唇をなぞり始める。

「こうするのです……べろおおお……べろろっ……べろおおおおお」

舌先に力を込めて彼の唇を適度に圧迫しながら、唾液ルージュを塗りたいくる。

「さあ、ユウ様もわたしのを」

五六度も厚塗りされて呆然としていた彼は、ハッとした。

「ワクチンの唾液をたっぷりつけて、わたしの……プリンセスの唇をご自分の舌で……さあ!」

「は、はいっ」

やけに威勢よく背中を押されて、やられたことをやり返す。

「れろっ……れろおおおお……れろろろろろおおおお」

「お上手です……あぁん」

庶民のヌルつく舌で唇をなぞられるのは、愛撫そのものだった。皮膚が薄くてどこよりも敏感な唇に、鮮烈な快感電気が走る。勝手に肩が固くなり、うなじに性感の鳥肌が立った。

「うわ……エロすぎ……オレ今、王女とドスケベ舌舐めリップし合っちゃってるよッ」

童貞男子も性感に打ち震え、しつこく舐め回してくる。

「エロいことに見えても、べろべろべろっ、これはワクチン接種、はふはふ、れろれろ、医療行為であり、なにもやましいことはありませんでしょう？」

王女は舌を舐められているところで顔を引いた。唾液塗れの口と口の間で、舌を絡ませる。

「え……う、うんっ、医療行為、べろべろべろ、医療行為だから、いやらしくないですから、セーフですからっ、れろれろれろれろれろっ」

童貞男子もオスの欲望を全開にして舌をしならせる。一瞬たりとも離れずに、王女の綺麗な舌全体と絡み合い、舐め回す。

(あぁん! わたしったら、童貞庶民などと、こんなにも破廉恥なキスをしてしまうなんてっ)

トロンとした目で赤面し、下品に唾液を撒き散らしながら、胸中で叫ぶ。

王族でありながら庶民と、いわゆるベロチューに耽る倒錯感と、握られかけた主導権を奪い返した実感で、粘膜同士を合わせる肉悦は倍増していた。彼女のカラダは燃えるように熱くなり、ドレスを脱ぎ捨てたい衝動に駆られている。

じわあああ。

もちろん、女のシンボルも、露骨に反応していた。カラダのどこよりも熱くなり、発情の蜜が溢れている。スカートの奥の純白ショーツには、楕円のシミが広がっていた。下半身から放たれる汗混じりの熱気は、欲情した若い娘の体臭を拡散させ、スカートの中にたちこめさせている。

(はああんッ……庶民童貞と抱き合いながらする、医療行為お下品ベロチューう……クラクラしてしまいます……)

細かい汗が浮かぶ赤ら顔の目尻を下げ、官能的に睫毛をヒクつかせる。

そのときだった。

**\*体験版はここまでです。続きは製品版でお楽しみください。**

## あとがき

本作は 2018 年 4 月上旬に創りました。

お下品エロいセリフがバンバン出る作品を創りたい。主にそんな気持ちから創った次第です。

挿絵にオノマトペやセリフを入れるのは、確か、初めての試みでした。他にもこれまでと比べて細かい部分を変えています。小説ともども、気に入ってもらえたら嬉しいです。

ご意見ご感想がございましたら、奥付のご都合のよいアクセス先まで、どうぞお気軽にお寄せください。

よろしければ、過去作もどうぞお試してください。最近の商業作品には以下のようなものがあります。ご購入、お楽しみいただけましたら、幸甚に存じます。

「絶対無敗騎士キリィ・タイム」

作 わたし

挿絵 トモセシュンサク 先生

掲載誌 二次元ドリームマガジン100号

「二次元エンド特集号」(KTC社刊)

\*100号記念号にして、内容も付録も大充実の永久保存版!  
是非是非、お手にとってお楽しみくださいませ。

「元女騎士は新人スパイ 先輩エルフと挑むオークの館潜入ミッション」

作 わたし

挿絵 風丘 先生

メディア 電子書籍専売品 (KTC社刊)

「バブルガール! デリヘルで目覚める娼婦の心」

作 わたし

挿絵 ミルクセーキ 先生

掲載誌 二次元ドリームマガジン97号「娼婦特集号」

(KTC社刊)

「女体化聖騎士セレス 甘美で危うい魔王暗殺計画」

作 わたし

挿絵 河野雅夫 先生

メディア 電子書籍専売品 (K T C 社刊)

「ピンサロ女騎士 悪徳大臣様のご指名で～す！」

作 わたし

挿絵 冥土黄泉 先生

掲載誌 二次元ドリームマガジン 9 5 号「丸呑み特集号」

(K T C 社刊)

拙作は他にもございます。

「木森山水道」で是非ご検索ください。

## 奥付

●制作● (2018年4月現在)

- ・小説 木森山水道 (別名義 きもりや)  
(サークル 夜山の休憩所)

ブログ <http://kimoriyamasuidou.blog115.fc2.com/>  
<http://b.dlsite.net/RG11385/> (夜山の休憩所の Blog)

ツイッター <https://twitter.com/kimoriya2>

ノクターンノベルズ <http://syosetu.com/usernovel/list/>

ピクシブ <https://www.pixiv.net/novel/member.php>

### ・挿絵

「佐野俊英があなたの専用原画マンになります」(G. J?社)

公式サイト <http://www.teck.jp/gj/>

利用規約 <http://www.teck.co.jp/gj/products/sano/qa/qa.html>

「佐野俊英があなたの専用原画マンになります」のシリアル  
S/N:GJ0079908

### ・フォント

はらませにゃんこ <http://inatsuka.com/extra/haranyan/>

ラノベPOP フォント <http://www.fontna.com/blog/1706/>